

過酷な運命に翻弄された、
20 人の子どもたち。

“私たちが忘れないで—”



INTRODUCTION

ドイツ第二の都市、ハンブルク。世界有数の港湾都市として知られるこの町の郊外に、かつてノイエンガム強制収容所がありました。第二次世界大戦勃発の前年（1938 年）、ナチ・ドイツによって設置された強制収容所のひとつで、ナチスの迫害を受けたユダヤ人や捕虜、政治犯など、1945 年の終戦までの間におよそ 10 万人もの人々が収容されました。1944 年 11 月 28 日。ここに、アウシュヴィッツ強制収容所から 20 人の子どもたちが送られてきます。収容所で親を失い孤児となった子や、家族と引き離されて連れてこられた 5 歳から 12 歳の 10 人の男の子と、10 人の女の子。フランス、イタリア、オランダ、ポーランド、スロヴァキアと、生まれた国は様々でしたが、皆、ユダヤ人の子どもたちでした。彼らは、“結核の人体実験”のために集められた子どもたちだったのです。



—— 大切なのは 考え続けること、そして、忘れないこと

過酷な実験で衰弱した子どもたちは、ドイツの敗戦が迫る 1945 年 4 月 20 日の夜、ナチ親衛隊によって殺害されます。「人体実験」という非人道的な行為の“証拠”を残しておくわけにはいかなかったのです。廃墟となった小学校、“ブレンフューザー・ダム”の暗い地下室で、誰にも知られずこの世から姿を消された 20 人の子どもたち。彼らの存在は、戦後、長い間、世間に知られることはありませんでした。時代が変わり、この惨劇に光が当てられるようになったのは、1970 年代の末頃から。ある一人のドイツ人ジャーナリストが

発表した、子どもたちについてのルポルタージュがきっかけでした。現在、ノイエンガム強制収容所とブレンフューザー・ダムは記念館へと姿を変え、多くの見学者や研究者を受け入れています。耐え難い運命の犠牲となった 20 人の子どもたちと、彼らの死を忘れまいと行動するドイツ、ヨーロッパの人々。死者と生者との出会いから生まれたのは、未来を照らす小さな希望でした。世界がどんなに変わっても、人間が決して手放してはいけな大切なこととは何か—問い続ける人々の姿を、ハンブルクの美しい風景とともに描く長編ドキュメンタリーです。



北のともじ

語り：吉岡 秀隆
音楽：阿部 海太郎
音響デザイン：井上 久美子
題字：大竹 亜希子
日本語字幕：吉川 美奈子
監修：石田 勇治（東京大学大学院教授）
撮影・監督：東 志津
（「花の夢 - ある中国残留婦人 - 美しいひと」）
2022 年 / 日本 / 110 分 / カラー / ステレオ
日本語・ドイツ語・英語
製作・配給：S.A プロダクション



ドキュメンタリー映画「北のともじ」特別先行試写会 & 東志津監督 記念特別対談

2022 年 6 月 24 日(金) 17:00~19:30 開場 16:30 会場：東京大学駒場キャンパス I 18 号館ホール 対談者：石田勇治（東京大学教授）

主催：東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK) E-mail: desk@desk.cu-tokyo.ac.jp http://www.desk.cu-tokyo.ac.jp/ DESK 共催：グローバル地域研究機構 (IGS)

7月23日(土)より
東京・新宿
K's cinema
ほか全国順次公開

※要事前参加登録 (ECCS アカウント限定)